

幼稚園と小学校における 「人とのかかわり」を主題とした教育実践 — 幼小連携・一貫した道德教育の実現可能性を検討するために —

助川 晃洋*¹・藤森 智子*²・後藤 和之*³

Educational Practices of “Relations with Others” :
Looking at the Cooperation between Kindergarten and
Elementary School in Moral Education

Akihiro SUKEGAWA, Tomoko FUJIMORI and Kazuyuki GOTO

1 研究の課題

幼稚園教育要領（平成20年3月告示）が小学校学習指導要領（同）を、小学校学習指導要領が幼稚園教育要領と中学校学習指導要領（同）を、中学校学習指導要領が幼稚園教育要領と小学校学習指導要領を、高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）が中学校学習指導要領を同一冊子内に収めていることは、今次改訂の大きな特徴であり、異校種間の接続／アーティキュレーション（articulation）の問題への政策的な関心の大きさを物語っている。「小1プロブレム」や「中1ギャップ」といった用語も、その適否は別にして、移行／トランジション（transition）期に生じる子どもの学校適応上の諸問題の総称としてすっかり定着し、それぞれの解消・克服を意図した幼・小や小・中の連携・一貫教育実践が、突出した特別区域だけでなく、いまや全国各地で行われている。アカデミックなレベルでは、平成22年6月刊行の日本教育学会機関誌『教育学研究』第77巻第2号において、「学校間接続をめぐる問題と今後の課題」という「特集」が組まれている⁽¹⁾。

本研究は、こうした政策、実践、研究の動向を背景としながら、幼稚園と小学校（ただし低学年、すなわち第1・2学年に限る）が連携した、或いはそれらを一貫した道德教育の実現可能性を検討するための前提・基礎作業として、幼稚園と小学校の教育内容のうちで、相互に共通性が認められる、或いは連続性・系統性が見込まれるものにかかわって、それぞれにおいて、どのような教育実践が計画されて、行われているのかを明らかにすることを課題としている。より具体的かつ限定的に言えば、本研究は、幼稚園と小学校における「人とのかかわり」を主題とした教育実践の事例として、宮崎大学教育文化学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園）と宮崎大学教育文化学部附属小学校（以下、附属小学校）での取り組みについて報告するものである。

*¹ 宮崎大学教育文化学部

*² 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

*³ 宮崎大学教育文化学部附属小学校

幼稚園の教育課程には、「人とかかわりに関する領域」である「人間関係」が含まれる。幼稚園教育要領によれば、これは、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」ものである⁽²⁾。また小学校学習指導要領は、道徳の内容の一つとして、「主として他の人とかかわりに関すること」を挙げている。小学校学習指導要領解説道徳編によれば、これは、「自己を他の人とかかわりの中でとらえ、望ましい人間関係の育成を図ることに関するものである」⁽³⁾。そして「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」では、「幼児期の教育と児童期（低学年）の教育」は、「共に、直接的・具体的な対象とかかわりを重視している点で共通点が見られる」のであり、その対象の一つは、「自分とかかわりや他の人・集団とかかわりである『人とかかわり』」であると述べられている⁽⁴⁾。こうした、いわば公定文書中の指摘自らに従う限りにおいて、本研究が、「人とかかわり」を主題とした教育実践に着目するのは、極めて妥当な判断であると筆者は考える。

II 附属幼稚園の取り組み

ここでは、「人間関係」のねらいと内容に関する幼稚園教育要領の記載事項を確認した上で、附属幼稚園が設定する「人間関係」のねらいと内容を提示し、4歳児の1～3期（この時期区分については後述する）にかけて行われたわらべうた遊びの実践について報告する。

1 幼稚園教育要領における「人間関係」のねらいと内容

幼稚園教育要領は、「人間関係」のねらいと内容を次のように定めている⁽⁵⁾。

1 ねらい

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

2 内容

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達とかかわりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみ

をもつ。

2 附属幼稚園における「人間関係」のねらいと内容

附属幼稚園では、在籍する子どもの年齢・発達段階、指導の時期や系統性等を考慮して、「人間関係」のねらいと内容を次のように設定している。

○3歳児

1期（4・5月）

ねらい

- ・先生や友達存在を知り、親しみを持とうとする。

内容

- ・自分の気持ちを言葉や態度で表現し、受け入れてもらい、安心する。
- ・先生と一緒に過ごしながらかかわり、親しみを持とうとする。
- ・先生や5歳児に身の回りのことを手伝ってもらったり一緒に遊んでもらうことで、親しみを感じ始める。

2期（6・7・8・9月）

ねらい

- ・自分の気持ちを色々な方法で表現しながら、先生や友達に自分からかかわろうとする。

内容

- ・自分の気持ちを先生や友達に言葉や態度で表現する。
- ・自分とは違う友達の思いに触れる。
- ・好きな遊びをしながら、気の合いそうな友達に気づき始める。
- ・他のクラスの先生や友達にかかわろうとする。

3期（10・11月）

ねらい

- ・気の合う友達を自分から探そうとする。

内容

- ・自分の気持ちを先生や友達に話したり、態度で表現したりする。
- ・友達には、友達の思いがあることを知る。
- ・友達に誘われたり、誘ったりしながら、仲よくなろうとする。

4期（12・1月）

ねらい

- ・自分の思いを言葉で表現しながら、気の合う友達と楽しく遊ぶ。

内容

- ・先生や友達に自分の気持ちを話そうとする。
- ・友達の話をお聞きしようとする。
- ・先生や友達に自分からかかわろうとする。

5期（2・3月）

ねらい

- ・気の合う友達と自分の思いを出し合いながら、楽しく遊ぶ。

内容

- ・友達に自分の思っていることを話すようになる。
- ・友達の話聞き、友達の思っていることに気づこうとする。
- ・自分から友達に声をかけて仲間に入ろうとする。

○4歳児

1期

ねらい

- ・先生や友達を知り、親しもうとする（新入児）。
- ・色々な先生や友達に親しもうとする（進級児）。

内容

- ・先生や友達とかかわりながら、親しみを持とうとする（新入・進級児共通）。
- ・先生や友達の遊びを見ながら、同じように遊ぼうとする（新入児）。

2期

ねらい

- ・先生や友達に慣れ、話したり、遊んだりする。

内容

- ・先生や友達のことを知り、親しむ。
- ・先生や友達に自分の気持ちを表現しようとする。
- ・自分とは違う友達の思いがあることに気づく。

3期

ねらい

- ・色々な友達と親しくなる。

内容

- ・同じクラスの友達とかかわりながら、他のクラスの友達や異年齢の友達とも親しくなる。
- ・友達の中で思ったことを自分なりに表現しようとする。
- ・友達の気持ちを知ろうとする。

4期

ねらい

- ・気の合う友達と考えを出し合いながら、遊ぶ。

内容

- ・色々な年齢の友達に親しみを持つ。
- ・気の合う友達を見つけ、親しくなる。
- ・思ったことを言葉で表現しようとする。
- ・友達の気持ちや考えを知るようになる。

5期

ねらい

- ・友達のよさを受け入れながら、親しくなる。

内容

- ・色々な友達のよさに気づいて、一緒に遊ぼうとする。

- ・思ったことや考えたことを伝えようとする。
- ・友達の考えも受け入れようとする。

○5歳児

1期

ねらい

- ・先生や友達に親しみを持つ。

内容

- ・好きな遊びをしながら、クラスの先生や友達に慣れる。
- ・同年齢の友達と遊んだり、年下の友達と遊んだりする。

2期

ねらい

- ・先生や友達に考えたことを話したり、相手の気持ちに気づいたりする。

内容

- ・好きな遊びをしながら、同年齢や年下の友達に親しみを持つ。
- ・自分の要求や気持ちを先生や友達に伝える。
- ・友達にもそれぞれの気持ちや考えがあることに気づく。

3期

ねらい

- ・友達とかかわりながら、互いの気持ちをわかり合おうとする。

内容

- ・色々な友達と気持ちを伝え合いながら、親しくなろうとする。
- ・自分の考えを表現したり、友達の意見にも耳を傾けようとしたりする。
- ・友達とのかかわりの中で、役割分担をしながら、遊ぶ楽しさを味わう。

4期

ねらい

- ・友達のよさに気づき、親しくなる。

内容

- ・自分の考えを表現したり、友達の考えを受け入れたりしながら、互いの気持ちを知ろうとする。

5期

ねらい

- ・色々な友達のよさを知り、一緒に過ごす楽しさを味わう。
- ・考えを出し合いながら、集団生活をより楽しくする。

内容

- ・友達の気持ちや考えを受け入れて、相談しながら生活する。
- ・多くの友達とルールのある遊びを十分に楽しむ。

3 わらべうた遊びの実践

(1) 主題

かかわる力を育てる援助のあり方ーわらべうた遊びを通してー

(2) 目的と方法

○友達への関心が薄く、集団での活動になかなか気持ちが向けられなかった子ども（H男）を対象児として、教師からの援助に対するH男の変化をとらえながら、わらべ歌遊びを通して、人とかかわる力を育むことができるように援助する。

○H男自身の発達や人とかかわる力の育ちに加えて、クラス全体の子どもの育ちにも注目して、季節や実態に応じたわらべうたを選曲する。

○6月と11月の計2回の実践の様子をビデオで撮影し、記録をまとめて、援助のポイントや今後の指導方針を明確にする。

(3) 考察

○教師との信頼関係を築くための援助

入園当初のH男は、興味のあるものが目に入ると没頭し、クラスでのわらべうた遊びに関心に関心を向けることは難しかった。そのため、教師と一対一でわらべうたで遊ぶ機会を作り、ゆったりとした雰囲気の中で、H男の思いを受けとめながら、かかわることができるように配慮した。わらべうた遊びを通して教師との心地よいかかわりを経験する中で、H男は、教師や友達のしていることにも自然と関心を向けるようになり、集団でのわらべうた遊びに参加する場面が増えた。教師との信頼関係を築く手立ての一つとして、わらべうた遊びは有効であったと考える。

○大人の寄り添いを必要とする子どもへの援助

集団でわらべうた遊びを行う際には、モデルとなる教師が見えやすい場所（教師の正面）にすわらせることを配慮した。また教師が仲介役になって、H男の気持ちに上手に寄り添うことができる子どもとペアを組ませ、友達とかかわる楽しさを体験することができるように援助した。その中で、相手の反応に期待を寄せてじゃんけんをしたり、自分の近くにいる教師や友達を見つけて手をつないだりするH男の姿を見ることができた。大人の寄り添いを必要とする子どもに対しては、教師が仲介役となって、友達と一緒に遊ぶ楽しさに気づかせる援助が必要である。

○繰り返しを通して、子どもの願いや発想を引き出し、楽しさを深める教師の援助

わらべうた遊びをする際、はじめはすわって参加していても、繰り返す中で、気持ちが高まると、立ち上がって歩きながら楽しむ姿が見られるようになった。教師が子どもの提案や発想を受け入れることで、子どもは、自分がしたい遊び方を言葉で伝えたり、動きで表現したりする力をつけている。繰り返すの中で、わらべうた遊びの楽しさを深めていくためには、子どもの思いを受け入れ、柔軟さを持ってかかわる援助が重要であると考えた。

○わらべうた遊びを通して、仲間意識を育む援助

「あずきちよまめちよ」では、繰り返し遊ぶ中で、子どもは、みんなで一つの輪を作ることに価値を見出していった。輪を作ることに成功した子どもは、みんなで一緒に遊ぶ楽しさや一体感を感じ、仲間意識を深めている。わらべうた遊びをする際、教師から先に輪になる遊び方を提案するのではなく、仲間意識の育ちを待ち、子どもが輪になりたいという願いを抱いたときに思いを受け入れて、実現することができるように援助することが大事である。

(4) 効果と今後の展望

○慣れ親しんだわらべうた遊びを繰り返し楽しむ中で、子どもは、相手との距離感や心地よいかかわり方を自然に身につけ、人とかかわる力の土台を築いている。またわらべうたの雰囲気

気に応じて、静と動のメリハリを体で感じながら遊ぶことができるようになると同時に、日常生活においても、落ち着いて話を聞く力を少しずつ身につけることができている。

○園生活で慣れ親しんだわらべうた遊びを、「自宅で口ずさんだり、家族に教えたりしています」という保護者からの感想が多く寄せられている。兄や姉からわらべうた遊びを教わる機会もあるようで、園以外の場所で習ったわらべうた遊びを、友達に教える姿も見られる。また園の様子を見る機会が少ない父親に、子どもがわらべうた遊びを教えることで、親子で楽しい時間を過ごすきっかけとなっているようである。親子でわらべうた遊びをする中で、保護者は、自分の子どもの頃を思い出して懐かしさを感じたり、子どもの仕草に愛おしさを感じたりするなど、わらべうた遊びが、親子の心の交流を深めるきっかけとなっていることがうかがえる。

○慣れ親しんだわらべうた遊びを繰り返す中で、4期のねらいである「気の合う友達と考えを出し合いながら、遊ぶ」姿につながる力をつけることができた。今後は、5期のねらいである「友達のよさを受け入れながら、親しくなる」姿を見通しながら、集団の中での一人ひとりの育ちを認め、人とかかわる力を育てることができるよう援助したいと考える。

Ⅲ 附属小学校の取り組み

ここでは、「主として他の人とかかわりに関すること」の内容に関する小学校学習指導要領の記載事項を確認した上で、附属小学校が設定する第2学年の「主として他の人とかかわりに関すること」の年間指導計画を提示し、「本当の気持ちは」の実践について報告する。

1 小学校学習指導要領における「主として他の人とかかわりに関すること」の内容

小学校学習指導要領は、道徳の内容の柱として、次の四つを設定している⁽⁶⁾。

- 1 主として自分自身に関すること。
- 2 主として他の人とかかわりに関すること。
- 3 主として自然や崇高なものとかかわりに関すること。
- 4 主として集団や社会とかかわりに関すること。

そして「主として他の人とかかわりに関すること」には、次の項目が含まれている⁽⁷⁾。

第1学年及び第2学年

- (1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。
- (2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。
- (3) 友達と仲よくし、助け合う。
- (4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。

第3学年及び第4学年

- (1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
- (2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
- (3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
- (4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。

第5学年及び第6学年

- (1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。
- (2) だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。

- (3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。
- (4) 謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。
- (5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

このうち本研究が、とりわけ注目するのは、もちろん第1・2学年のものである。小学校学習指導要領解説道徳編によれば、(1)は「他の人とのかかわりにおける習慣の形成に関するものであり、状況をわきまえて心のこもった適切な礼儀正しい行為ができる児童を育てようとする内容項目」、(2)は「他の人に接するときの基本的姿勢に関するものであり、相手に対する思いやりや親切な心を持ち実践のできる児童を育てようとする内容項目」、(3)は「友達関係において基本とすべき精神を述べたものであり、友達との間に信頼と友情及び助け合いの精神をもった児童を育てようとする内容項目」、(4)は「広く人々や自己の生活の成り立ちに対する尊敬と感謝の念をもった児童を育てようとする内容項目」である⁽⁸⁾。

2 附属小学校における「主として他の人とのかかわりに関すること」の年間指導計画

附属小学校では、学年別に、上述した内容の柱ごとの年間指導計画を立てている。第2学年の「主として他の人とのかかわりに関すること」であれば、次の通りである。一つの主題につき1時間、一つの内容項目につき1～3時間が割り当てられており、合計8時間の配当である。

実施月・週	主題名	内容項目	ねらい
4月 第3週	あいさつで あかるく	(1)	気持ちのよいあいさつや言葉遣い、動作に心がけて、明るく生活しようとする道徳的心情を育てる。
6月 第2週	まわりの人に やさしく	(2)	身近にいる困っている人にあたたかい心で接し、親切にしようとする道徳的態度を育てる。
9月 第1週	正しい うけこたえ	(1)	人に対して、気持ちのよい言葉遣いをしようとする道徳的態度を養う。
9月 第3週	ありがとう お母さん	(4)	身の回りでお世話になっている人々の愛情に気づき、感謝する道徳的心情を育てる。
10月 第3週	本当の気持ちは	(2)	身近な若い人、高齢者に対して、あたたかい心で接しようとする道徳的心情を育てる。
12月 第1週	助け合う友達	(3)	友達と仲よくし、助け合おうとする道徳的態度を育てる。
12月 第2週	心をつなぐ あいさつ	(1)	気持ちのよいあいさつの大切さを自覚し、進んで行おうとする道徳的態度を養う。
2月 第4週	おじいちゃん ありがとう	(4)	自分達の世話をしてくれる人や、みんなのために尽くす人に、感謝しようとする道徳的態度を育てる。

3 「本当の気持ち」の実践

(1) 資料

こうえんのおにごっこ

しんじたちは、こうえんいっぱい ひろがって、おにごっこを していました。
そこに、ようちえんに かよっている ゆうたが きました。ゆうたは、こうつうじこで
大けがをしてから、みんなと おなじようには はしれません。でも、ともだちと あそぶ
のが 大すきです。

「ぼくも、入れて。」

ゆうたが そういうと、みんなは かおを 見あわせました。

しんじは、ちょっと かんがえてから いいました。

「ゆうちゃんには、しんぼんを してもらおうか。」

すると、よしえが いいました。

「それは かわいそう。いっしょに やりましょうよ。」

みんなは ゆうたを 入れて、おにごっこを はじめました。

まず、よしえが おにに なりました。よしえは、ゆうたに ちかづくど、きゆうに む
きを かえて ほかのともだちを おいかけました。ほかのみんなも、ゆうたのそばに い
くと、わざと はしるのを おそくしたりしました。やがて ゆうたは、ジャングルジムの
ほうに いってしまいました。

「ゆうちゃんは、どうして やめちゃったのかな？」

しんじが そう いうと、みんなは だまりこんで しまいました。

しばらく かんがえた みんなは、もう一ど ゆうたを さそい、おにごっこを はじめ
ました。

おにに なった しんじは、こんどは おいかけるいきおいで、つい ゆうたに タッチ
してしまいました。

(しまった! ゆうちゃんが おにだと、おいかけるのが たいへんだぞ。)

ところが、ゆうたは きゆうに 元気になって、みんなを 力いっぱい おいかけはじめ
たのです。ゆうたが はりきっているので、みんなも、だんだん たのしくなってきました。

やっぱり ゆうたは、なかなか タッチできません。でも、こうえんのすみに ともだち
を おいこんで、にげられないように するのが とても じょうずでした。

しんじたちは、日が くれるのも 気づかないほど、むちゅうで おにごっこを つづけ
ました。

(永田直子作「こうえんのおにごっこ」による)

以上の資料は、学研『みんなのどうとく 2ねん』に所収されている⁽⁹⁾。

(2) 授業展開の概要

○導入

学校探検や交流学習の際に、(年下の)相手に対してどのように接していたかを思い出させ
る。

やさしくできていた子どもを賞賛しつつ、だからこそ、もう一度そのことについて考えてみようということ、めあての設定につなげる。

めあて：やさしい気持ちについて考えよう。

○展開前段

基本発問1：「ぼくも、入れて。」と言われたとき、しんじはどう思ったのでしょうか。

教師の意図：しんじが、迷いを感じていることに気づかせる。

子どもの発言（板書より。以下、同じ）：「だいじょうぶかな」、「またこけたら…」、「入れようかな」、「自分たちのせいになる」、「どうしよう」。

中心発問：一緒に遊ぶことを決めたのだけれど、ゆうちゃんのそばに来たら走るのを遅くしたり、向きを変えたりしたんだね。すると、ゆうちゃんが、ジャングルジムの方に行ってしまったんだ（「つままない」）。それを見たとき、しんじは、どんなことを考えたのでしょうか。

教師の意図：子ども達なりに、問題の原因を考えながら、ゆうちゃんに対して、わざと走るのを遅くしたことが悪かったということに気づかせる。

子どもの発言：「どうしたのかなあ…」、「なんで?」、「わざとおそくしたから」、「ちゃんとはしれば…」。

基本発問2：ちゃんと走ろうと決めてやっていると、ゆうちゃんも張り切ってきたんだね。そのときしんじは、どう思ったのでしょうか。

教師の意図：ゆうちゃんを遊びに入れてよかったという思いに気づかせる。

子どもの発言：「たのしいな」、「入れてよかった」、「うまいなあ」、「ゆうちゃんは元気だな」。

○展開後段

しんじは、最初迷ったけど、ゆうちゃんと遊びました。でも、ちゃんと走らなくて、ゆうちゃんを傷つけてしまいました。でも、最後はちゃんと走って、みんなで楽しめました（以上、資料の振り返り）。

みんなは、誰かにやさしくしてよかったなあと思ったり、やさしくされたりしたことはありますか。

○終末

教師の説話による。もしくは子どもの振り返りの中から、全体にかかかわるエピソード（「1学期に骨折した子にみんながやさしくしていた」）を取り上げる。

IV 今後の展望

本研究では、幼稚園と小学校における「人とのかかわり」を主題とした教育実践の事例として、附属幼稚園と附属小学校での取り組みについて報告した。今後においては、それぞれが別個に行ってきた実践を、どのようにすればつなげることができるのかを検討し、カリキュラムの提案を行うことで、幼小連携・一貫した道徳教育実践の創造に貢献したいと考えている。

そもそも我が国では、学校教育入門期としての小学校低学年、とりわけ1年生の指導をどうするかについて、一種のスタートカリキュラムの問題として扱われてきた経緯がある⁽¹⁰⁾。大正新教育運動の中で、例えば澤柳政太郎の私立成城小学校が、それを実践と研究のテーマにしている。このことは、次のように評価されている⁽¹¹⁾。

澤柳や成城小学校が、低学年教育—とくに、系統的な学習への入門期の指導の内容と方法—に関して独自の掘りさげた理論的検討を加え、一定の実践的試みと問題提起を行なったことは、日本のカリキュラム史上における重要な貢献として評価されてしかるべきだろう。

ただし澤柳が、低学年（3年生まで）の修身科を廃止していたこともまた、ここで銘記されてよいだろう⁽¹²⁾。

さらに我が国では、平成元年3月に改訂された小学校学習指導要領において、低学年の理科と社会科が廃止され、生活科が新設されたことを受けて、様々なモデル授業の具体例が示され（有名なところでは、ザリガニ、アリ、ヒマワリ、ミニトマトを教材としたものや生活マップづくり）、同時期の諸外国に見られた類似の事例、とりわけドイツの基礎学校において設けられていた統合教科「事実教授（事物科）」（Sachunterricht）—その起源は、改革教育学運動期の「郷土科」（Heimatkunde）にまで遡る—のカリキュラムと実践が紹介されるとともに、オットー（Berthold Otto）の家庭教師学校の中心原理としての「合科教授」（Gesamtunterricht）⁽¹³⁾や、奈良女子高等師範学校附属小学校主事・木下竹次の「(自律的) 学習法」理論とその低学年段階への実践的適用として始まった「合科学習」⁽¹⁴⁾といった歴史的遺産の再検討が行われるなど、「低学年カリキュラム」や「合科的な指導」にかかわる研究上の議論が活発に繰り広げられている⁽¹⁵⁾。

また幼児期後半から小学校低学年にかけての時期の子どもの発達上の特徴の一つが、遊びから手仕事や労働と学習への分化・発展に見られるということは、すでに定見となっている。よく遊ぶ子ほど、よく働く子、よく勉強する子に育つ可能性を秘めていると言われるが、経験的な推測に基づくこととはいえ、それが一つの真理であることは疑いない。しかしそれは、あくまでも可能性に過ぎない。遊びの絶対的貧困とともに、それが知的好奇心の喚起や持続的な学習につながっていかない現実があることも確かであり、安易に口にしたくはないが、遊びの指導の今日的な存在理由を、消極的には承認せざるを得ない。

幼小連携・一貫教育の望ましいあり方を構想するためには、こうした関連する実践の成果や研究上の知見に学びながら、また子どもの現状とそれをめぐる言説を踏まえながら、自覚的な努力を強化することが必要であろう。

執筆分担：ⅠとⅣは、助川が単独で執筆した。ⅡとⅢは、それぞれ藤森と後藤が資料と草稿を準備し、助川が改め、完成稿とした。

注

- (1) pp.132-194.
- (2) 『幼稚園教育要領』 文部科学省 2008 (平成20) 年3月 pp.13-14.
- (3) 『小学校学習指導要領解説 道徳編』 文部科学省 2008 (平成20) 年8月 p.35.
- (4) 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告)」 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 2010 (平成22) 年11月 p.11.
- (5) (2) と同じ pp.14-15.
- (6) 『小学校学習指導要領』 文部科学省 2008 (平成20) 年3月 p.102.
- (7) 同上 pp.102-104.
- (8) (3) と同じ pp.42-43.
- (9) 2005 (平成17) 年 pp.75-77.
- (10) 小学校学習指導要領解説生活編では、次のように述べられている。
 「特に、学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うことなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした」。
 「低学年児童の発達には未分化な特徴をもつことから、このような工夫は必ずしも入学当初に限らず、2年間にわたって積極的に行うことが大切である」。
 すなわちスタートカリキュラムとは、4月段階の特別カリキュラムであると同時に、1年間、或いは2年間の視点で構想されるべきものであると考えられる。
 『小学校学習指導要領解説 生活編』 文部科学省 2008 (平成20) 年8月 p.7.及びp.58.
- (11) 水内宏 「解説 (三) 成城小学校におけるカリキュラム改造と澤柳政太郎—若干の特徴点—」 澤柳政太郎著 成城学園澤柳政太郎全集刊行会編 『澤柳政太郎全集第4巻 初等教育の改造』 国土社 1979 (昭和54) 年 p.467.
- (12) 次の三つの論文で澤柳は、修身科教授の開始時期を正面から論じている。
 澤柳政太郎 「修身教授は尋常第四学年より始むべきの論」 澤柳政太郎著 成城学園澤柳政太郎全集刊行会編 『澤柳政太郎全集第4巻 初等教育の改造』 国土社 1979 (昭和54) 年 pp.42-49.
 澤柳政太郎 「再び修身教授は尋常四学年より始むべきを論ず—反対論者に答ふ—」 同上 pp.50-56.
 澤柳政太郎 「特設科としての修身教授は尋常四年より始むべきの議」 同上 pp.64-67.
- (13) 「ベルトールド・オットーが、ベルリン郊外リヒターフェルドに家庭教師学校を開校したのは1902年のことであった」という指摘があるが、これは必ずしも正確ではない。1902年というのは、年俸3000マルクで特定の職務上の義務もなしに、ただベルリンに住んで教育問題に発言するという条件で、アルトホーフ (Friedrich Althoff) によってスカウトされて、オットー一家がベルリンに移り住んだ年である。確かにこの年からオットーは、周囲の要望があったことに加えて、自分の子ども達が成長して、適当な交流・観察対象を失ってしまったという事情も重なって、ユニークな教育活動を開始している。しかし家庭教師学校の創設は1906年、正式認可は1907年のことである。
 山下徳治著 海老原治善編 『明日の学校』 明治図書 1973 (昭和48) 年 p.107.
- (14) 木下竹次著 中野光編 『学習原論』 明治図書 1972 (昭和47) 年 pp.334-336.
- (15) 水越敏行・吉本均編著 『生活科と低学年カリキュラム』 ぎょうせい 1993 (平成5) 年